

啄木日記

新編石川啄木選集 5

APRIL.

TOKYO.

7TH, WEDNESDAY.

HONGO-KU MORIKAWA-TYO I BANTI,
SINSAKA 359 GO. GAIHEIKAN-BESSO NITE.

eta Sora ni susamajii Ote wo tatete,
ni Nisi-kaze ga hiki areta. Sangai
Mado to yû Mado wa Taema mo naku
-gata naru, sono Sukima kara wa
uka Sita kara tatinobotta Sunahoko
sara-sara to huki komu. sono ku
ra ni tirabatta sira Kimi wa ti
no ugokanu. Gogo ni natte Kaze ni
yô itituita.
Haru nari Hikage ga Mado ni
nigarasu wo atataka ni someta.

SHUNJÛ BOOKS

啄木日記

春秋社版

啄木 日記

編集 渡辺雁三・石川正雄

新編石川啄木選集 5

啄木日記

〈新編石川啄木選集・5〉

1960年10月10日 第1刷発行 定価 ¥200

検印
省略

編者 © 渡 辺 順 三
石 川 正 雄

東京都千代田区神田宮本町10

発行者 神 田 竜 一

東京都荒川区尾久町2の451

印刷所 精文堂印刷株式会社

発行所 東京都千代田区 株式 春秋社
神田宮本町10 会社

電話 神田(251) 4715, 6575 振替 東京 24861

(小林製本) 落丁・乱丁本はお取替えいたします。

N.D.C. 918

目次

まえがき（編者）

澁民日記（明治三十九年）……………九

八十日間の記……………一五

明治四十丁未歳日誌……………二〇

函館の生活……………二七

明治四十一年日誌……………三五

其一……………三五

其二……………五二

緑の都——新生活……………	三
其三……………	六
明治四十二年……………	七
ローマ字日記（明治四十二年四月）……………	一〇六
ローマ字日記の終りに（編者）……………	一五〇
明治四十三年四月より……………	一五三
前年（明治四十三年）中重要記事……………	一五五
明治四十四年（当用日記）……………	一五九
千九百十二年日記（明治四十五年一月～二月）……………	一八六
解説……………	一九
岩城之徳……………	一九

啄木日記

明治三十九年——四十五年

凡 例

一、この『啄木日記』は、啄木の自叙伝、一箇の文芸作品（長編創作）として興味多く読まれうるよう編集した。

二、したがって日記原本を底本として、大いに取捨を加え、採録した日の記述にしても、全体の筋に関係のない備忘や議論は、かなりはぶいてある。しかし採録した部分については、文字の訂正・増減などを加えてはいない。

三、本選集中の評論・小説・書簡と同じく、原則として当用漢字・新カナヅカイにあらためた。当時の文人と共通に、あるいはそれ以上に、啄木には難読の漢字やあて字が多いが、これによっていちじるしく読みやすくなったと思う。

四、難読の漢語にルビをつけ、またわかりにくい語・人名等には（六ボイント）の注をつけた。

五、「ローマ字日記」中の伏字は、既刊のものとはほぼ同じである。

六、本巻の編集・校訂には石川正雄があたった。

まえがき

啄木の日記は、かれが死んだら日記は焼いてく
れといったとかで、死後『啄木全集』（新潮社版）
を編纂した土岐・金田一両氏でさえ、焼却された
ものとして、死後十年以上もその存在を知らな
かった。

ところが啄木死後、北海道函館に移り住んだ未
亡人節子は、ノート・原稿類などと共に、夫啄木
の唯一のかたみとして、篋底深く秘藏していたの
である。だがすでに、そのころ啄木の病に感染し、
深く胸部を痛めていた節子は、病状が悪化し、夫
啄木の一年忌直後、死の床に臥し、その臨終にあ
たり、啄木の生前から一家が世話になっていた義
弟宮崎郁雨（大四郎）氏に、一家に対する厚誼に
むくいるかたみとして、それらを贈ることを遺言
して世を去った。かくて遺児の親権者節子の父堀
合忠操氏から、宮崎氏に贈られたのである。ただ

当時タブーとされていた大逆（幸徳）事件にふれ
ている明治四十四年の日記だけは遺児にのこされ、
現在も石川家に所蔵されている。

ところが、目ごろから啄木を畏敬していた、宮
崎氏の親友函館図書館長故岡田健藏氏が、啄木を
永く記念すべく、図書館内に啄木文庫を創設、宮
崎氏に対し、それらの寄贈を懇請し、一方宮崎氏
も万一の散逸を憂慮していたので、日記というも
のの性質と、故人が焼いてほしいといったという
遺志を尊重し、非公開を条件にすべてを函館図書
館に寄託したのである。大正二年のことである。

その後日記の存在が知れると共に、出版社がい
ろいろ策動したりして問題があったが、岡田氏は
頑としてそれらをしりぞけ、函館図書館の書庫深
く秘藏されていた。今日なお啄木の日記が存在す
るのは、以上の人に負うところのものだった。

やがて終戦後、啄木の日記は社会的文化財とし
て公表すべしという、各方面の要望やかましく、

そこで関係者協議の上、昭和二十三年十一月、ついに『啄木日記』全三巻として、世界評論社から公刊、ようやく陽の光りを浴び、世にその真価を問われるに至ったものである。

現在のこされている啄木の日記は、明治三十五年、かれが十七歳の秋、家事上の都合で、卒業まぎわの中学を中途退学したとき、上京して運命をきりひらこうとした、その上京日記から始まっている。ただしその時は、その目算がごとくはずれ、滞京わずか三カ月、日記も三十五日間だけ、次いで明治三十七年、年少浪漫詩人として『明星』誌上に名が出たとき、いかにも気負ったことが書かれているが、それも三カ月間、いずれも断片的なものにすぎない。

かれが続けて日記をつけたのは明治三十九年郷里浜民村における小学校代用教員時代からである。そこで本書は、この「浜民日記」以後、晩年ま

でを、系統をたてて抄録した。

ところでこの「浜民日記」は、何かもやました村民との対立が書かれていて、了解しにくい点が見られるが、それには啄木自身、背後の真相を知らなかったのではないか、と思われる節があるので、ここでちょっとそれにふれておきたい。

「浜民日記」は、石川一家が、一度村人から追われて村を去り、それから一年後、啄木を中心に再び居を移したときのことである。

さて啄木の父一禎が、浜民を追われたについては、啄木の知らない原因があった。

啄木の父石川一禎は、幼少時代に両親とはなれ、ひとり禪門で育った人で、大変すぐれた師僧にいたためか、どこか排俗高踏的な性格がつつかわれ、その人柄が、卑俗な一般農家の人たちとそりが合わず、何となく親しみをもたれなかったらしく、その結果、これという理由はないが、一般村民から何となく反感みたいなのをもたれていた

のである。もちろんそれは、表面に現われたものでなかった。

ところがそれが、そのころちよつとしたことから表面化し、單純素朴な村人を刺激し、それが昂じて排撃にまで發展し、ついに多年住みなれた宝徳寺住職の職を追われ、そのため故郷となつかしんだ渋民村を去らねばならなくなつた。いわば一禎一家は、村を追われたのである。それは誰が悪いというような問題ではなく、所詮は、一禎の身にまつわる宿命とでもいうべきものであつた。

ところが日ごろから坊ちゃん育ちの啄木は、そんな大人の世界は知らず、しかもそのころかれは、詩人を夢みて東京におり、父が村を追われた事情など、全然知るところがなかつた。

一方父一禎は、僧侶としてより外の生活の道を知らず、しかもそのとき老齡五十七歳、陸に上つた河童と同じで、頼りになるのは、たった一人のあととりむすこ啄木だけだつた。

だがその啄木は、何の生活苦も知らぬ一青年、しかも夢を描く文学志望の浪漫児であつた。そのかれに、一家生計の重責がかぶさつたのである。そこで思いついたのは、父を一度追われた宝徳寺に再住させ、後顧の憂いをのぞき、その上でおのが理想とする文学の途に進もうと考え、父の宝徳寺復帰運動のため、さしあたりの生活のため渋民小学校代用教員の職を求め、再び渋民村に居をかまえたのである。

だが村人には、その啄木の渋民村再住の意図がわからなかつたばかりか、さきに一家を追ひ出しただけに、今、東京で新進詩人といわれる啄木が、故郷とはいえ、こんな草深い山村に腰を据えてきたのは、何か腹黒いことを考へてのことにちがいない、そしてそれが一禎の宝徳寺再住運動のためとわかると、かれらが一禎を排撃追放したというひげ目があるだけに、さては今度は親子して村を支配し、かれらに対処するつもりなのだろうと、

疑心暗鬼をもったのだった。

「浜民日記」の生活は、こういう背景のもとに、くりひろげられたのである。

啄木がこの中で、村人とのたたかいということを書いていくが、実は両方共に相手の真意を知らず、たがいに幻想が生んだ、無名のたたかいであったのである。そしてこれが、後の啄木の多難な生涯の出発となったものだった。

「浜民日記」は、こうした前提を頭に入れて読むと、いくらか理解の足しになるかも知れない。

さて、それはそれとして、啄木は時代に対して大変敏感で、それがかれの成長進歩を早やからしめたひとつの原因ではなかったかと思う。そんなわけで、あの短かい生涯に、思想感情の上で、大きな転期が三べんあった。

その第一回が、実にこの浜民日記の時代だった。かれはここでまず、若き空想的ロマンチズムの破綻の淵に立たされたのである。今様の言葉でい

えば、若き日の悩みとでもいおうか。しかし言葉はそうでも、その内容は今様と大きなちがいがあ
る。それはかれの背後をとりまく当時の社会状況
である。——無財産の若きロマンチスト啄木の小
さい肩には、現代のような、ささやかとはいえ、
社会保障というようなものが何ひとつなく、老い
た両親を加えた一家生計の責任を負わされていた
ことであつた。その中で、かれがどのような生き
方をし、そして次々の時代の転期をどのような
かえ、うけとつたか——それがこの「啄木日記」
に描かれている。それは人生に対する誠実な詩人
啄木——死後五十年をへた今日なお、多くの人々
の中に脈脈と生きる、人間啄木のいつわらぬ人生
記録である。

その意味で、「啄木の日記」は啄木を知る上で、
下手な伝記よりはるかにすぐれた、著述のひとつ
といつてよからう。

(編 者)

洪民日記

西曆一千九百〇六年
明治三十九年

○三月四日

九カ月間の杜陵（盛岡の雅称）生活は昨日に終りを告げて、なつかしき故山洪民村における我が新生涯はこの日から始まる。

洪民は、家並百戸にも満たぬ、ごく不便な、共に詩を談ずる友のほとんど無い、自然の風致のすぐれた外には何ひとつ取り柄のない野人の巢で、みちのくの広野の中の一寒村である。我が一家のこの度の転居は、企てた洋行の、旅券も下付にならぬうちに、中止せねばならぬ運命に立ち至ったことや、田舎で徴兵検査を受けたためや、また生活の苦闘の中に長く家族を忍ばしめることの堪えられなかったためや、閑地に隠れ

て存分筆をとりたかったためや、種々原因のあることであるが、新住地としてなぜにこの僻陬（へきう）を撰んだか。それは一言にして尽きる。曰く、洪民は我が故郷——幾万方里のこの地球の上で、もっとも自分と関係深き故郷であるからだ。「故郷」の一語に含む甘美たぐいなき魔力が、今まで、長く、深く、強く、常に自分の心の磁石を司配（しはい）していたからだ。——故郷はいわば、神が特別の恩寵をもって自分のために建てられた自然の大殿堂である。忘れもせぬ一年の前、自分が東京の空にさまようていたころ、はからずも両親がこの洪民を見捨てねばならぬ運命になってからというもの、自分はいかに幾度あたたかい涙をもってこれを悲しんだか。故郷は、実に無限の魔力をもって我が全心をひきつけていたのである。……………

ああ、この世のいとも安けき港！ その安けき港に今日から舟がかりする身となったのだ。あたかも一の姉が鹿角（かかく）（秋田県北東部の郡名）の里で永眠した七日目、在天の姉が魂も必ずやこれからの我が幸を守ってくれることであろう。

父は野辺地（青森県上北郡の町）が浜にあり、妹をば通っている学校の女教師の家に下宿さすことにして盛岡に残した。母とせつ子と三人、午前七時四十分盛岡発下り列車に投じて、好摩駅に下車、凍てついた横すべりする雪路を一里。街の東側の南端から十軒目、斎藤方の表座敷がすなわちこの我が一家当分の住居なので、とりあえず机をすえたのは六畳間。畳も黒い、障子の紙も黒い、壁は土塗りのままで、いうまでもなく幾十年の煤の色。例にはもれぬ農家の特色で、目に毒なほど焚火の煙がみなぎっている。この一室は、我が書齋で、また三人の寝室、食堂、応接室、すべて兼ねるのである。

取り片付けや何やかや、うやむやの中に日が暮れた。晚餐には知人数名、祝いのしるしの盃も四合瓶一本の古酒でことたりた。

○三月十一日

尽日降雪。夜客来る。

与謝野氏（鉄幹＝寛、「明星」の主筆者）へくわしき消息

認む。「今まで生活の苦闘の冬枯の中にいじけ候私、これよりは心の枝に立ちかえる春を楽しまばやと思ひ候。……心は遠くかけり去なむの欲念にひねもす羽搏ち悩みながら、身は瘦せて麻のごとく弱く、あまつさえ人知らぬ逆運の鎖につながれて動きもならぬ私、しばらくは我慢の權を折り妄念の帆網たちきりて、一夜なりとも安けき眠りを求めては、所詮この世の荒海にまめまめしく永らうること叶うまじくと覚え候。さらむからに、かかる私が全身心を投げ出して打ちまかせつべきもの、二十とせの恋人なる故郷を除いては、幾十万里の世界の中、いづくに求め候うべき。げに幼児のごとき愛着と、尽くることなき追憶にみちみちたるこのなつかしきふるさとの清浄なる空氣を除いては、今の私を癒すべき靈葉、いづれの所にも見あたるまじくと覚え候。……………」

私はこの度の田苑生活のうちに、専念詩筆をみかくの覚悟は申すまでもなきことながら、なお外に数編の小説と、ある別種の著述二三とを脱稿いたしたき心願に御坐候。……また、来たる四月より当村小学校に教

鞭をとるはずに相成りおり候。月給八円の代用教員！

天下にこれ程名譽なこともあるまじく候が、これは私自身より望んでのことに御座候。但し、自己流の教授法をやることと、イヤになればいつでもやめることとは、郡視学も承知の上にて承諾せしものに候えば、私の姓名の上に浪民尋常高等小学校代用教員（月給八円支給）という肩書きのつく間が、数カ月なるか、数カ年なるか、私にもわからず候えども、とにかく私はこの機会をもって、天真なる児童の道德、美、ないし宗教に対する心理を、ある目的のため出来るだけ子細に研究して見るつもりに御座候。私もこの故郷の狭き天地にありては、案外の信用もあり勢力もあり、たとえ俸給と席次が末席でも一村の教育については、思うままになる次第、あまり自慢にもならぬ話に候えども、私に教えられる児童は幸福なることと信じ申し候。小児と遊ぶが大好きな私、何はともあれ、教壇に立つ日を少なからぬ興味を以て鶴首いたし候。……平野君訳トルストイの「楽人のおとろえ」読み候う節は何かは知らずきわめて痛切に感ぜらるる節ありて、枕につきて

よりひとり涙を流し申し候。……」

○三月十二日

天下太平。日本無事。六畳の一室に三人も雑居しては、何もかく気になれない。妹から金の請求状がきた。客のない日とてはないが、ツマラヌ話ばかり。こんな風では頭が貧乏になるではないか。……………

今日から綿入れを脱いだ。みちのくの三月、雪が一尺もある国で、袷に襦袢で平気なのは、自分と、凶荒に苦しむ窮民のみであろう。そのためでもあるまいが、この夜、政府で窮民に売る一食一錢六厘の軍用パンを小児らに買わして食って見た。

○三月二十三日

川口村明円寺の岩崎徳明より、曹洞宗特赦令の写し、送りきたる。早速野辺地へ送る。

この日小学校の卒業式あり。誘われて自分も参列した。無邪気な児らのうれしそうな顔が、三百もならんでいて、そして声を合わせて「螢の光」を歌った時、

自分はもうたうれしいやら昔恋しいやらで、涙も出るばかり可愛く思った。自分が六才にして初めて知識の光をおがんだのが、実にこの郷校であつたのだもの。

式後、学校の職員諸氏や村長などと共に、祝盃をあげた。一日雑談。夜は、沼田清民氏がきて、自分がこの村にきたことについての村人の種々なる意嚮を話して行つた。自分はマサカこの洪民をどうしようこうしようと言う程には老いざるつもりで、今度移住してきただのも、しばらくこの閑境にかくれて他日の準備をしようと思うだけなのに、ああ田舎の天地はやはり狭いものである。自分の頭脳がもう少し貧しかったら、こんなこともあるまいに。人を猜疑するということは、自分にはない経験である。

ナニ、この俺をどうすることが出来るものか。またよしや、ことが起つたにしても、自分はきわめて平気である。

自分にこられては、村中かきまわされるというので、絶交状まで飛ばして移転間際に妨害したのもあつたが、自分が手早く手許に切り込んで、突然来てしまつ

たので、計画画餅、弁解ですましてしまった。まことに笑止な次第ではないか。今度また自分が学校へ出るようになる、やはり一人がかき回すからというので妨害の相談中だとか、自分はたかが二十一才の一青年ではないか、それに孫子供もある分別盛りの古老共が、何をそう苦に病むのであろう。自分が代用教員になるというのは、無論一生を教育界に投ぜんとするのではない。ただ、この村にいる間、児童の心理も研究して見たし、またかたがた故山の子弟に幾分なりと善良な感化を与えてやりたいからだ。月俸八円が生命にかえりも欲しいというでもなく、陰に一村の政治を動かそうなどの野心を持つてゐる暇はない。小さい村を左右したところで自分には何になるか。学校に出るなどというなら、出なくても差支へはない。まことに笑止な次第である。その癖自分に逢うと、頭を低くして御機嫌をとるから奇妙ではないか。………所詮、自分のきたのは、彼らに一つ苦の種がふえただけのことである。

○四月七日

好天気。十一時ころひとり家を出て、蘭を掘るべく
鷹沢へ遊びに行った。この村へきてから初めての散歩
で。

四方の山々、樹は皆冬枯のままながら、踏み行く路
に草の若芽もかぞえられる。日の温かなこと。目にふ
れるものの数、皆旧知のままである。口笛をふいた。
隠沼に水鏡して見た。そして子供のように喜んだ。

村役場からこいというので行って見ると、学校へ出
るのがいよいよ決定するから、履歴書を出せとのこと。

○四月十一日——十六日

十三日に村役場に出頭、十一日付の「済民尋常高等
小学校代用教員を命ず。但し月俸八円支給」という辞
令を受け、翌十四日（土）から尋常第二学年の教壇に
立つことになった。我が自伝が、この日、また新しい
色彩に染められた。

ただ一つ遺憾に思うのは、自分はなるべく高等科を

受け持たなかったのだがそれが当分出来ぬことである。
これは自分が教壇の人となるのが、単に読本や算術や
体操を教えたのではなくて、出来るだけ、自分の心
の呼吸を故山の子弟の胸奥に吹き込みたいためである
のだ。それには高等科あたりが最も適当である。十二、
三才から十五、六才までが、人の世の花の蕾の最もふ
くよかに育つ時代で、一朝開華の日の色も香も、——
ないしは、その一生に通ずる特色というものの、——多
くこの間に形作られる。尋常二年といえ、ホンの頑
（ぜ）はない孩提にすぎぬので、自分の心の呼吸を吹き込む
などということは、夢にも出来うる所でない。

しかし、彼らの前に立った時の自分の心は、怪しく
もおさえ難なき一種の感激にみたまされたのであった。
神のごとく無垢なる五十幾名の少年少女の心は、これ
からまったく我がが一上一下する鞭につながれるのだな
と思うと、自分はさながら聖いものの前に出た時の敬
虔なる顫動を全身の脈管に波打たした。不整頓なる教
員室、塵埃にみちみちたる教場、顔も洗わぬ垢だらけ
の生徒、ああこれらも自分の目には一種よろこばしき

感覚を与えるのだ。学校は実に平和と喜悅と教化の大玉城である。イヤ、是非^{ぜひ}そうさせねばならぬ。

現在の職員は、師範出の、朝鮮風な八字髻をはやした、まずノンセンスな人相の標本といったような校長と、この村の人で、三十年も同じ職に勤めている検定試験上りの訓導と、師範女子部出身の我が友上野女史と、そして自分と、四人である。

○四月二十一日 晴。土。

待ちに待ったる徴兵検査がいよいよこの日になった。学校をば欠勤。午前三時半に起床。好摩^{こうま}から六時に乗車して沼宮内^{ぬまぐない}町に下車、検査場なる沼福寺に着いたのが七時半ころ。検査が午後一時になって、身長五尺二寸二分、筋骨薄弱で丙種合格、徴集免除、かねて期したることながら、これでようやく安心した。

自分を初め、徴集免除になったものが元氣よく、合格者がかえって頗^{すぶ}る銷沈^{しょうしん}していた。新氣運の動いているのは、この辺にも現われている。

○四月二十四日——二十八日

自分は、一切の不平、憂思、不快から超脱した一新境地を発見した。何の地ぞや、曰く、神聖なる教壇、すなわちこれである。

.....

二十六日から高等科生徒の希望者へ放課後課外に英語教授を開始した。二時間ないし三時間くらいつづけざまにやって、生徒は少しも倦^うんだ風を見せぬ。二日間で中学校で二週間もかかってやるくらい教えた。初めの日は二十一名、翌日は二十四名、昨日は二十七名、生徒は日一日とふえる。

.....

予は余の在職中になすべき事業の多いのを喜ぶものである。予は予の理想の教育者である。予は日本一の代用教員である。これくらいうれしいことはない。またこれくらいうれしいこともない。

児童はみな予のいう通りになる。なかんずくたのしいのは、今まで精神に異状ありとまで見えた一悪童が、今や日一日に自分のいう通りになってきたことである。